

1. 学習会の趣旨

びわ湖の問題は滋賀県あるいはローカルな地域には知られているが、その現状が広く知られているとは言いがたい。しかしながら日本で一番大きな淡水湖であるびわ湖は近畿1400万人のみずがめとも言われ、日本人の10人に1人はこの水の恩恵を受けていることになる、重要な淡水資源でもある。今回、このびわ湖の現状とびわ湖が抱える問題について、近畿以外の学生たちに知ってもらうことによって、普段びわ湖になじみのない学生たちがびわ湖に触れる機会を提供し、大学を超えたネットワークにつなげ、さらにはびわ湖トラストの今後の活動の方向を探る機会としたいという目的があった。

2. 夏の学習会の開催にあたって

日本陸水学会・日本地理学会のメーリングリストや全国の地理学教室にポスターを郵送するなどして周知を行ったが参加希望学生が少なかったため、知り合いの研究者を通して参加を呼びかけるなどを行い、学生を募った。その結果、知り合いの研究者を通して参加してきた学生とそれ以外の学生がそれぞれ半々ずつ程度になり、合計12名の学生が参加した¹。

3. 夏の学習会のスケジュール

●1日目（9月5日（日）） （長谷川・畑中・角）

18時半までに	旅館花村へ各自チェックイン	担当：長谷川・畑中
19時～20時	夕食	
20時～21時	行程説明・自己紹介・質問要旨提出・班別ディスカッション	長谷川・角

●2日目（9月6日） 船上学習（後藤・川村・浜端・角・野崎・石津・佐々木・畑中・長谷川）

<もちもの>熱中症対策・飲み物はたくさん準備を！

7：00	朝食
8：00	集合（宿から学生の引率は長谷川、角）
8：30ごろ	浜大津出港（弁当も積み込み：畑中、長谷川）
8：30～9：00	移動 浜大津港－琵琶湖博物館棧橋

¹ 実際の応募学生は13名であったが、1名は直前になり入院することが決まり、結果的に12名となった。

9:00～10:00 琵琶湖博物館棧橋

棧橋で浜端先生乗船・甲板で記念撮影（水草観察後、棧橋で浜端先生下船）

水草観察（適宜レクチャー：滋賀県立大学 准教授 浜端悦治）

泥サンプル採取 20kg～30kg（担当 川村先生 石津・佐々木）

10:00～11:00 移動 琵琶湖博物館棧橋－北湖N局

移動中 講義「環境のために必要な知の統合」講師 立命館大学教授 川村貞夫

11:00～13:30 北湖N局

水中ロボットによる湖底観察（川村先生 石津・佐々木）

ロボット投入準備に15分程度必要

・水質調査（後藤先生 太田）

・プランクトン観察（後藤先生 太田）

船上で昼食

13:30～14:00 移動 北湖N局－多景島棧橋

14:00～15:00 多景島棧橋

・水中ロボットによる湖底観察（川村 石津・佐々木）

・水質調査（後藤先生）

15:00～17:00 移動 多景島棧橋－浜大津港 途中 沖の白石をめぐる

移動中 講義 「水圏生態系～びわ湖を例に～」 講師 滋賀県立大学准教授 後藤直成

17:00 帰港予定 下船して、MEGUMIをバックに記念撮影

18:30～19:30 夕食

19:30～20:30 「地球温暖化による湖沼環境の変化と生態系への影響」 講師 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 研究員 熊谷道夫

レクチャーの後、有志で飲み会

●3日目（9月7日） 水草・討論会（浜端・学生4名・長谷川・畑中）

<もちもの>水着・タオル・ビーチサンダル

8:00 朝食

9:00 チェックアウト・荷物は車に積み込む。バスで移動（220円）（引率長谷川・角）

9:30～11:00 湖岸で水草狩り体験（柳が崎周辺）<水着か胴長> 写真 浜端

（11:00～12:00 オプション、銭湯で泥を落とす（入浴料一人650円））

12:00～13:00 お昼

13:00～16:00 討論会へ向けてのグループ編成、グループ作業（琵琶湖大津館）

16時ごろ 解散

4. 事後学習

（ア）個別レポート…①夏の学習で学んだこと、②他大学の学生との交流を通じて得た

こと、③びわ湖トラストは今後どういう役割を担うべきであり、それはどのように実現可能か の3点について

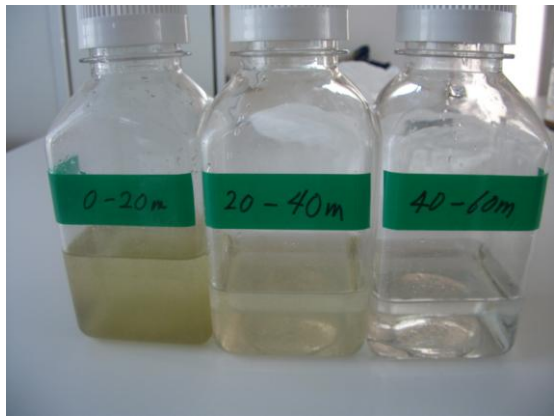
- (イ) 各グループごとのレポート…発見した問題点やそれに対する改善点を意見交換しあっておく。グループごとに意見をまとめる
- (ウ) アンケート…みなさんは琵琶湖を実地で学んだ環境学習リーダーの卵です。この自分の体験を活かし来年度のびわ湖トラスト水環境学習会において、初めて琵琶湖の環境を学ぶ高校生に琵琶湖の問題について自分が教えるとしたら、何を伝えたいですか？

以上3点のレポートは 10 月 15 日頃をめどにトラスト事務局へ提出。(メール添付でOK)。

そしてそれぞれ秋冬の間考えを温めつつ、また、2月末にみんなで再会！

5. 実習の様子







夏の学習会をおえての感想 長谷川直子

- 全体として、トラブルなどなく終えることが出来たのは良かった。
- 学習会全体を通して、学生のモチベーションの高さに驚いた。大学の単位にもならない学習会に参加しようという意欲がある学生だからということもあるだろう。また、応募時になぜこの学習会に参加したいかなどについて書いてもらっているため、軽い気持ちで参加しよう、という学生が事前にふるい落とされていることも大きいだろう。このような小論文を課したことで応募学生が少なかったという事実はあるが（後述）、高いモチベーションを保った学生のみ参加したことで、一日目から学生同士の議論が大変盛り上がり上がっていたことにつながったと考えている。

- ・ 今回、参加学生は 12 人であった。これらの学生を 3 人ずつの 4 グループに分けて学習を行った。特に、船上学習では作業スペースがかぎられていることと、機器などを使用するため、この 4 グループを 1、2 グループと、3、4 グループの 2 つにわけて、6 人ずつで作業することがほとんどであった。これ以上学生数が多くなると機器を間近で見れなかったり、作業を体験することが出来ない学生も現れたであろうと思われる。かといって、人数が少なすぎても盛り上がりにかける。結果的に、12 人という人数は学生一人一人がしっかり学べる適正人数であったと思われる。
- ・ 学生の出身大学、出身地方、学年、専門分野が多岐にわたるため、普段の大学では見られないような光景が多くあった。まず、自分と異なる分野の学生と（特に理系の学生と文系の学生）一緒に議論する場をはじめて得たという学生が多かった。これは、「琵琶湖について学ぶ」という目的に加えて、学生にとっては貴重な経験であったと思う。
- ・ 今回の学習会に関して一番苦労したのが学生集めであった。一度目の募集の時には 1 名しか応募者がおらず、再募集では助成金額を倍増させてなおかつ知り合いの先生たちに声かけをしてやっと 12 名集まったという状況であった。周知に関しては学会の ML や大学宛のポスター郵送などかなりの労力を裂いたつもりであるがそれでも難しかった。興味はあったが結果的に応募しなかった自分の周りの学生の話を見ると①第 1 回目の募集の段階で、助成金額が少なかったため、自己負担が 4 万円近くかかってしまい金銭的に難しい（再募集の時には 70 箇所の大学宛にポスター再郵送をしていないため、助成金額倍増という情報を知らないままあきらめた学生もいた可能性もあるだろう）、②応募時の小論文を書くのが大変だから。「どうやって広めたいか」と聞かれてもかけるほどのものを思いつかないので出せない、という意見もあった、③夏は参加できるが 3 月の予定が今からわからないので出せない、逆に 3 月は可能だが夏に予定が入っていて参加できない、といったものがあつた。
 - ① に関しては、再募集で金額を増やしたことで結果的に 12 人集まったのだと思うが、その情報を広める手段について工夫が必要だと思われる。ただもしも来年度この事業を行う場合には、今年度の参加学生の反応は良かったので、研究室単位で口コミが広まり後輩などが参加を申し出る可能性が出てくるだろう。
 - ② に関しては、これによって学生の応募は減少したであろうが結果的には質の高い学生が適正人数集まったので課してよかったのではないかと思う
 - ③ に関しては、学習内容の趣旨から言って（夏と冬の違いをみる）、理想的には両方参加としたい。が、現実的には 7 月の応募時点で翌年 3 月も参加できると考えて 9 月の実習を終えても、何らかの理由により 3 月に参加できないこともありうると思う。そこで、補欠リストを作り、定員に満たなかった場合には 1 回だけの参加も認めるとしても良かったかもしれないと考えている。

- スタッフとしてこのような（自分の大学以外の学生たちと交流する）学習会を企画・運営するのは始めてであったが、（学生集めや計画の甘さなどの反省事項も含めて）自分としても得るものが多かった。また、学習会最終日の学生たちの反応も、学習会に対して有意義であったという意見であり、やった意味はあったと思う。学生が多くのことを学んだ、この学習会が有意義であったという事実は、学生のコメントペーパーやレポートによく現れていると思う。また、個人的な感情ではあるがこの学習会は事務局の畑中さんの頑張りなしには成功しなかったと思う。彼女に感謝したい。